

勿凝学問 251

民主主義とは「最大多数の最大幸福」か、それとも「多数の専制」か？

ベンサムとジョン・スチュアート・ミルが観たそれぞれの世界

2009年9月28日

慶應義塾大学 商学部

教授 権丈善一

ノルウェーに留学している学生が、ゼミの掲示板に。

仕事のページは毎日かかさずチェックしております。

友人から本日の授業で

「自分が死んでからすぐに J. S. ミルと結婚したハリエットの旦那はいったいなんだったのかという先生の疑問に一同大爆笑。」というのを耳にしました。ハイルブローナーもさらっと書いているところが面白いです（笑）。

誰か授業の講義録(?)のようなものをパソコンでとってる人がいたら教えてください。

講義は、なにも、ハリエット・テイラーの話がメインではなかったぞ——ちゃんとまじめな話もしたような気がするんだけどねえ。

「最大多数の最大幸福」を唱えたのはベンサムであり、「多数の専制」を言ったのは J. S. ミル。どちらの方が、民主主義というものの実態を描写していると君らは考える？と問うたのが、2009年秋学期第1回目9月25日社会保障論の授業——なぜに、社会保障論でそんな話が？などは言わないこと¹。

ジョン・スチュアート・ミルの父親のジェームズ・ミルは、ベンサムを囲む「哲学的急進派」の1人であり、息子 J. S. ミルがベンサム思想に基づく政治改革のリーダーとなるよう英才教育を施す。その英才教育はすさまじく、J. S. ミル3歳のときからギリシャ語を学ばせ、ソクラテス、クセノフォンなどの書を原書で読ませる。8歳になると学習にラテン語も加えられ、J. S. ミルは13歳でリカードの『経済学および課税の原理』、アダム・スミス

¹ 2001年に出した『再分配政策の政治経済学 I』の序章にある、次の文章をご参照あれ。多くの方は、わたくしが社会保障を考えると言いながら、なにゆえに、ほぼすべての章にわたって<権力の話>を登場させるのかと、奇妙に受け止められるかもしれない。また、ヴェブレン、ミュルダール、ガルブレイスの考え方が分析の基礎になっていることや、マキャベリの話などが出てくることとのつながりを疑われるかもしれない。しかし、わたくしにとっては、これらはすべて、十分に、社会保障論なのである。

の『国富論』を読み終えている。

そういう教育を受けた J. S. ミルが、父親ジェームズ・ミルの意図に反して、ベンサム
「最大多数の最大幸福」と対立するとともに「多数の専制」を言うことになる。それは、
なぜ？

ヒントは、ベンサムが『道徳および立法の諸原理序説』を出したのは 1789 年であり、J. S.
ミルが『代議制統治論』を書いたのは 1861 年というように、彼らが生きて観察した世界が
異なること。

すなわち、『道徳および立法の諸原理序説』が出版された 1789 年はフランス革命勃発の
年であり、イギリスでも少数が支配していた時代だった。「最大多数の最大幸福」はこの時
代に唱えられ、封建的諸制度を打破しようとする自由主義的改革の理論的武器として広く
世の中で活用された。しかしながら、J. S. ミルが生きた時代は、トクヴィルによって『ア
メリカの民主主義』で衆愚政治に陥っているアメリカの状況が報告されたり（特に 1835 年
に発刊された下巻）、1840 年代には労働者が選挙権を求めるチャーティスト運動がピークを
迎え、1848 年の共産党宣言が出されており、1864 年にロンドンで第 1 インターナショナル
が開催される前夜だったのである。

『代議制統治論』〔岩波文庫 白 116-9〕の中でミルは次のように言う〔J. S. ミルは日本
語が得意ではないようです…〕。

代議制民主政治に付随する危険に、2つの種類があることは、すでにみてきた。
すなわち、代議機関およびそれを統御する民衆世論における治世の度が低いこと
の危険と、数的な多数者側での、これがすべて同一階級から構成されているため
の階級立法という危険である。

.....

代議制統治の自然的傾向は、近代文明のそれと同じく、集团的凡庸さに向かっ
ていて、この傾向は、選挙権のあらゆる引下げと拡張によって増大させられる。
なぜならば、その結果は、共同社会における最高水準の教育をますます下回る諸
階級的手中に、主要な権力を与えることになるからである。しかし、すぐれた知
性や性格は、数では劣ることにならざるを得ないけれども、彼らが傾聴されるか
どうかによって、大変な相違が生じる。偽の民主政治においては、すべてに代表
選出を許す代わりに、地方的な諸多数派だけにそれを許すのであり、教育ある少
数者の声は、代議機関でまったく発表機関をもたないかもしれない。この誤った
方式に基づいて構成されたアメリカの民主政治においては、その共同社会の高い
教養のある人びとは、彼らのうちで自分たち自身の意見と判断の仕方を犠牲にし
て、自分たちより知識の劣った人びとの卑屈な代弁者に喜んでなろうとしている
人びとのほかには、連邦議会もしくは州議会に立候補することさえせず、かれら

が選出される見込みのないことは、それほどたしかなのだという事は認められた事実である。

では、J. S. ミルが期待する議会の本来の役割とは？

代議合議体の本来の任務は、それが根本的に適していない統治という機能ではなく、政府を監視し統御することである。すなわち、その諸行為に公開性の光をあて、だれかが疑問に思うすべての行為について、十分な説明と弁明をさせ、断罪されるべきことがあれば非難し、また政府を構成している人びとが、その信託を悪用したり、国民の熟慮された意向と矛盾するやり方でその信託に対応するならば、彼らを免職し、明示的または実質的その後任者を任命することである。

そして J. S. ミルのいう真の民主主義とは？

いまスケッチした代議制民主政治、すなわち多数派だけではなくすべてのものを代表する代議制民主政治においては数的に劣勢な人びとの利害関心、意見、知的水準がそれにもかかわらず傾聴されるだろうし、数の力には属さない影響力を、人格の重みと議論の力によって獲得する機会をもつだろう。この民主政治だけが平等であり、これだけが不偏であり、これだけがすべての人によるすべての人の統治であり、唯一の真のタイプの民主政治なのであって、これは現在流行中のまちがって民主政治と呼ばれ、現行の民主政治という観念がもっぱらそれからひきだされているものの最大の諸害悪とは無縁である。

J. S. ミルの言う「多数の専制」に抑圧される「少数」は、J. S. ミルをはじめとした「教育のある人びとの少数派」のことなのである。J. S. ミルが、どのような改革案を提示したのか——そういうことは自分で本を読みなっということ、講義は、いきなりケインズ型消費関数における限界消費性向と縁付エジワースボックスの関係について——というのが、先日の授業。

でっ、授業の中で雑談として話した——先日の話すべてが雑談とも言えるのだけど——ハリエット・テイラーと J. S. ミル、そしてジョン・テイラー氏の話をも簡潔に紹介。

1830 年 J. S. ミル 25 歳 テイラー氏の紹介でテイラー氏の奥方、ハリエットと会う。

テイラー氏公認の下、J. S. ミルはテイラー氏と交際を続ける。

二人でフランスやイタリアに旅行にも出かける。

1849 年 ジョン・テイラー氏、ハリエットの手厚い看護に感謝しつつ、彼女に莫大な財産を残して死亡

1851 年 J. S. ミル 43 歳 ハリエットと結婚

僕はついつい、講義の中で、「ハリエットの旦那の人生というのは、いったいなんだった

んだろうね」とつぶやいてしまったわけだ——ちなみに、I巻のあとがきに記している義父はベンサムに詳しい法学者で、はじめて挨拶に行く電車の中、あの時ほど本を集中して読んだことはないような気がしないでもない……あの日は、ベンサムのベの字も登場しなかったけど、いやはや。。

通信教育はこれ限り（笑）